手法でもあります。いっぽう、保存処理の分野では、従来から困難とされていたクスノキなどの交錯木理を有する大型木材の真空凍結乾燥法による開発研究が成功し、実用の域に達したことは、今後、より困難な大型出土木製品の保存処理に期待がもたれます。

（埋蔵文化財センター　肥塚隆保）

文化財情報研究室（埋蔵文化財センター）

文化財情報研究室では調査員２名からなり、15名の派遣職員の協力を得て、データベースの更新作業をおこなっています。また、さまざまな文化財からいかに有効な情報を引き出し、それをどのように電子化していくかについての研究もおこなっています。その一環として、遺跡に関する情報の統合的分析のために、GIS（地理情報システム）の研究も進めています。

当室で直接に入力作業をしているのは、図書データベース、遺跡データベース、写真データベース、航空写真データベースなどですが、他のデータベース、例えば木簡データベースなどに関しても、設計や文字データの変換、画像データの調整などに係わっています。また、データベースサーバやファイルサーバの管理・運用もおこなっており、内容面とともにハード面でも、管理部文化財情報課と協力して、奈文研の情報システムを支えています。

データベースにおいては、情報の信頼性が大切です。種々の資料からデータの入力をおこなっていますが、資料そのままを入力するのではなく、参考文献にあたったり、いろいろな辞書を参照しながらの作業となります。　（埋蔵文化財センター　森本　晋）

データ入力作業風景

退官に寄せて

初めて奈文研に来た日

1969年の３月下旬、ポカポカ陽気のその日、私は東京を出て近鉄奈良駅に降り立った。プラットホームは木製の桟橋ふうで、それはまだ地上に出ていた。東文研の関野克先生と一緒だった。多分、先生は所用があって、ついでに、４月から奈文研にお世話になる私を連れて来てくださったのだろう。春日野の研究所本部でご挨拶をした後、ライトバンに乗せてもらい、バラック街さながらの平城砦に着いた。田圃のど真ん中にポツンとその一角をなしていたので、そう思えた。そこは平城宮跡発掘調査部、その拠点だった。拠点の案内人は、黒セーターの端正な顔立ちの男性だった。その人は町田章現所長だった。入所後のほとんどの期間を町田さんの直属で過ごしたのも深いご縁を感じる。発掘の成果、保存科学的な問題点を中心にご案内いただいた。

澤田正昭さん

管内を一回りしたところでちょうどお昼時となった。帰ろうとして、事務所にご挨拶に伺ったら、優しそうな眼鏡の先生が「昼飯を食べていきなさい！」と親しげに声をかけてくださった。これから仲良くしていただくためにはそれもいいかと、食堂という名のプレハブ小屋についていった。30人くらいがいっせいに昼食をとる。家族的でほほえましい光景だった。座席を確保したところで、ふと、入籍したばかりのわが妻をひそかに外に待たせていたことを思いだした。今さら帰るというわけにもいかず、わけを話した。「オーッ！連れて来い！」。親睦をモットーにしている私は、妻と二人で昼飯をごちそうになった。ネギがたっぷり入ったみそ汁がおいしかった。やさしい先生は狩野久さんだった。何とも厚かましい新人である。その年の７月には、調査部の同僚３人と共に結婚のお祝いをしていただいた。恒例のチョンガー惜別の洗礼を受けるのが慣わしだったからだ。洗礼のようすを書く余裕は無いが、激しくも思い出深いパーティだった。

あっという間の34年間でした。楽しい思い出ばかりが脳裏をかすめる今日この頃です。奈文研に、そして先輩・同僚のみなさまに心からの感謝を申し上げる次第です。ありがとうございました！！

（埋蔵文化財センター長　澤田正昭）